

トルコにおけるクルドの春

間 寧

クルド独立派組織であるクルディスタン労働党（PKK）とトルコ政府との間で過去三〇年間続き、四万人の命を奪った紛争に終焉がみえてきた。PKKはトルコ政府との交渉の末、今年五月にすべての兵力（約五〇〇〇人）の北イラクへの撤収を開始した。本レポートでは、PKK紛争終結の背景と今後を、トルコの内政と周辺諸国との関係の観点から分析する。

● PKK武装闘争の経緯

PKKはクルド民族の独立を目指して一九七八年にアブドゥッラー・オジャランによりトルコで結党された。その後、トルコ政府の弾圧から逃れてシリアに基地を構えてトルコ領内に侵入、一九八四年にトルコの南東部を中心に武装闘争を開始した。PKKとトルコ国軍の間の紛争は一九九〇年代に激化したを図1、PKKをかく

まうシリアに対してトルコが一九九八年一〇月に最後通牒を突きつけると、シリアはPKKの基地を閉鎖し、オジャランを国外追放した。

オジャランは逃亡後、一九九九年二月にケニアのギリシャ大使館で拘束されトルコへ引き渡される。と、裁判で死刑判決を受けた（その後の刑法改正で終身刑に減刑）。拘束されたオジャランが停戦を呼びかけ、北イラクのカンディルに逃避したPKKの指導部もこれに応じて二〇〇〇年から四年間はPKK紛争は下火になった。

しかし民主化後のイラクでPKKがクルディスタン地方政府の庇護を享受するようになると二〇〇四年にPKK指導部強硬派がオジャランの弟を含む穏健派を追放・粛正し、再び武力闘争に転じた。後述のようにトルコ国内での被害が増大すると、二〇〇七年一月、二〇〇八年二月、二〇一一年

年八月にはトルコ軍が北イラクのPKKに対する越境攻撃を行うまでになり、トルコ政府とイラク政府およびクルディスタン地方政府との関係が悪化した。

このようにPKK紛争が続く一方で、獄中のオジャランやカンディルのPKK指導部は二〇〇四年以降も毎年のように停戦を宣言し、数カ月後にそれを破棄するということを繰り返してきた。その表層の原因は、PKK指導部で新たに生じた穏健派と強硬派の対立や、分派した過激派による単独行動などに求めることができる。また停戦がPKK兵力建て直しのために利用されているに過ぎないと指摘もあつた。しかしこの矛盾する行動の真の原因は、トルコ政府がオジャランおよび他のPKK指導者と和平のための秘密交渉を行っていたことにある。PKK側は、和平への姿勢を示す方で、交渉上の立場をできるだけ有利にするために武力闘争を用いていたのである。

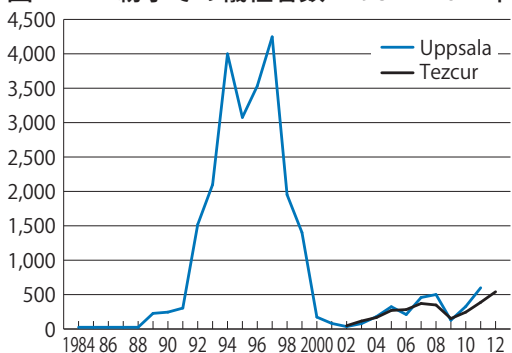
● 政府とPKKの秘密交渉

二〇〇二年総選挙で公正発展党（AKP）政権を

樹立したレジェップ・タイップエルドアン（二〇〇三年より首相）は、PKKを含めたクルド問題の解決を長期的に模索していた。PKKとの戦いはトルコの人的・経済的資源の大きな損失をもたらしていた。それに加え、AKPはクルド人からの支持がクルド政党である平和民主党（BDP）に次いで強いため、クルド問題の解決はAKPのクルド地域での支持基盤確立に繋がるとい背景がそもそもあつた。クルド地域では宗教性が強いように、AKPもクルド人をトルコ人と同じムスリム同胞として接してきた。

政府はクルド語放送拡充やクルド語教育機関設立などをEU加盟

図1 PKK紛争での犠牲者数：1984～2012年



（出所） Uppsala Conflict Data Program (2013) およびTezcur (2013) より筆者作成。
（注） Uppsala Conflict Data Program (2013) はPKKと軍人を合わせた1984～2011年の犠牲者数の下限推計値。Tezcur (2013) はPKK、軍人、民間人を合わせた2002～2012年の犠牲者数。

の条件として実現したが、それとは別に、エルドアンはトルコの従来の国民国家認識、すなわちトルコ人はすべてトルコ民族であるとの認識をも変革しようと試みた。エルドアンは二〇〇五年八月、トルコは民族モザイク国家なので、トルコ人とは上位アイデンティティであり、下位アイデンティティとしてはトルコ民族、クルド民族など、多様なものがあると世論に訴えた (Milliyet 2013)。ただしこの主張はトルコ民族主義派からはもちろん、宗教保守派や世俗主義派からも、トルコを分裂させるとの厳しい批判に合い、世論の認識を変えることはできなかった。

ところでエルドアンが世論変革を試みたこの時期は、PKKとの和平模索開始時期に一致する。政府は二〇〇五年以降、イムラル島刑務所に服役中のオジャランPKK党首と秘密裏に断続的に交渉し、PKK武装闘争終結の可能性を探った。二〇〇九年夏には政府がクルド自由化策を打ち出したが、その裏ではオスロでの秘密交渉(オスロ過程)が進展していた。オスロ過程での合意により、同年一〇月にはPKK戦闘員と協力者三四名がイラク国境から帰還するまでに至った。

しかし帰還者が群衆の前で勝利を宣言すると、これに政府が反発し、帰還者を投獄した。その後もオスロ過程は秘密裏に続いたが、二〇一一年七月に突如中断された。その背景には同月のPKKによる「偶発的」国軍攻撃事件や、同年六月総選挙戦でエルドアン首相がトルコ民族主義に訴えてオジャランを糾弾したことなどによる政権とPKKの間の相互不信の高まりがあったとされる (International Crisis Group 2013)。オスロ過程は、政権およびPKKが裏で取引をしながらも表の政治で両者が機会主義に流れたことで頓挫したといえる。

●秘密交渉から公開交渉へ

オスロ過程の中断はその後、決定的になった。政府がオジャランと直接交渉していることが総選挙後にメディアに漏洩され、しかもオジャランと交渉していた国家諜報局(MIT)局長らに二〇一二年二月、逮捕状が出されたのである。しかしこのような(司法府を握る、エルドアンと袂を分かったイスラム勢力による)和平への抵抗は、かえって和平交渉を加速させた。交渉決裂は、政府が和平反対勢力に屈したことを意味するからである。政府は同月、MIT局

員などの逮捕に首相の許可を義務づける立法により逮捕請求を取消させた。

他方、シリアの内戦で二〇一一年八月以降、トルコが反体制派支持を明確にして以降、PKKのトルコにおけるテロ活動が頻発した。特に二〇一二年七月から八月にかけてイラク国境付近のシエムディンリでPKK自爆テロが頻発すると、国軍が掃討作戦を行った。同八月には南東アナトリアでBDP国会議員がPKKと抱擁する映像がインターネットに流出、一月にはオジャランPKK党首の獄中待遇改善を要求して国内各地の受刑者がハンストを行うなど、政府とPKKの関係は悪化した。

しかしハンストがオジャランの呼びかけで開始から六八日目に終了すると、PKKの交渉相手としてのオジャランの影響力を政府は再認識した。年齢(現在六五歳)を気にするようになったオジャランにとっても身柄の自由を獲得するには和平が必要だった。この機に政府はPKKと交渉していることを公に認め二〇一三年一月、MIT長官が政府特使としてオジャランと交渉開始した。同月パリでPKK幹部三名暗殺されたが、和平交渉の妨げとはならなかった。また同月、(クルド語を含む)母

語での口頭弁論を認める刑事訴訟法が成立し、PKKの従来の要求のひとつが実現した。

二月にはBDP議員が獄中のオジャランと面会して和平に向けた彼の提案を聞き取り、北イラクのPKK指導部に伝達した。そして三月のクルドの新年にオジャランが和平を呼びかけ、北イラクのPKK指導部も停戦を宣言した。この間、政府は武装解除と撤退を、PKKとBDPはPKK戦闘員の身の安全を保障するための法改正ないし国会決議を、それぞれ要求するものの、合意に至らなかった。しかしPKKは自らが宣言した五月八日までに北イラクへの撤退を開始した。急進展する和平交渉について、国内では当初懐疑的な見方もあった。政府は四月、六三名の知識人、経済人、芸能人からなる賢人会議を召集して全国(七地域別)に派遣し、PKKとの和平についての世論を把握すると同時にその理解を得ようと試みた。トルコで信頼をおかれる世論調査会社のKONDAが五月後半に行った全国調査で和平への支持率は八割に達した。

●和平の効果と今後

南東アナトリアでは現在平穏な状態が続き、戦闘が最も激しかつ

たハツカリ県のユクセコヴァ郡にもピクニック客が訪れるようになった。PKK紛争に終焉の見込みが立ったことの効果は大きくいつて三つある。第一に、エルドアンに対するクルド人の支持を高める。二〇一四年に（トルコ初の直接選挙による）大統領選挙への出馬が見込まれているエルドアンは、大統領選挙での（上位二候補による）決選投票回避を狙っている。そのためには約五割を超える支持率を必要とするが、クルド人の支持は、五月末以降のイスタンブルを中心とする国内抗議行動への弾圧で批判にさらされているエルドアンに利するであろう。第二に、より長期的には、南東アナトリアで住民流出が緩和する一方、農産加工業を中心に資本や労働の流入が期待できる。チグリス河流域にあるバトマン県の工業団地にはすでに一二五企業が入居申請している（Hürriyet 2013）。

第三に、隣国のイラクとシリアにおいてそれぞれの中央政府から独立傾向を強めるクルド勢力とトルコの関係構築を促進する。イラクではマリキ首相が独裁的政治手法に傾くなかで、クルディスタン地方政府がトルコとの経済関係を深化させてきた。トルコの対イラク輸出の八割がクルディスタン向

けである（Masrafi 2013）。またクルディスタン地方政府は、イラク全体の石油収入のうち同政府の受け取り分を中央政府が未払いであることを理由に、クルディスタン域内産出の原油と天然ガスをトルコに輸出することでトルコと合意したとされる（Financial Times 2013）。内陸のクルディスタン地方政府にとって、対外貿易の窓としてのトルコの役割は両者の関係改善によりさらに大きくなるだろう。

シリアではPKKの姉妹組織である民主統一党（PYD）をはじめとするクルド勢力がアサド政権との直接対決を避けつつ自治を開始している。トルコ政府はシリアでのPYDの台頭がトルコのクルド民族主義を鼓舞する可能性に神経をとがらせてきたが、PKKとの和平によりその不安を軽減したといえる。

ただし、今後のロードマップはオジャランも政府も示していない。政府はPKKの武装解除と国外退去を求めたが、PKKが亡命状態の永続化を受け入れるとは考えにくい。PKKは和平の代償として将来的にはトルコ帰還と政治参加を視野に入れているからである（Tezcür 2013）。現在の和平状態を恒久化するためにはさらなる交渉が必要である。

る交渉が必要である。

（はざま やすし／アジア経済研究所 中東研究グループ）

《参考文献》

- ①Financial Times 2013. "Turkey: more oil and gas deals with Iraqi Kurdistan," <http://blogs.ft.com/beyond-brics/2013/05/22/turkey-more-oil-and-gas-deals-with-iraqi-kurdistan/?#axzz2WQpdUieY> (Accessed May 24, 2013).
- ②Financial Times 2013b. <http://blogs.ft.com/beyond-brics/2013/03/29/guest-post-turkeys-peace-dividend/#axzz2WQpdUieY>
- ③Hürriyet 2013. "Doğu'ya göç başlıyor," <http://www.hurriyet.com.tr/ekonomi/23053746.asp> (Accessed June 17, 2013).
- ④International Crisis Group 2013. Turkey: "The PKK and A Kurdish Settlement," Europe Report N° 219 - 11 September 2012. <http://www.crisisgroup.org/>/media/Files/europe/turkey-cyprus/turkey/219-turkey-the-pkk-and-a-kurdish-settlement.pdf (Accessed May 20, 2013).
- ⑤Masrafi, Naz 2013. "Guest Post: Turkey's Peace Dividend," *Financial Times*, <http://blogs.ft.com/beyond-brics/2013/03/29/guest-post-turkeys-peace-dividend/#axzz2WQpdUieY> (Accessed April 10, 2013).
- ⑥Milliyet 2013. Kimlik değişimi, <http://www.milliyet.com.tr/2005/12/13/siyaset/axsiy02.html> (Accessed June 6, 2013)
- ⑦Tezcür, Güneş Murat 2013. "Prospects for Resolution of the Kurdish Question: A Realist Perspective," *Insight Turkey* Vol.15 No.2, pp.69-84.
- ⑧Uppsala Conflict Data Program 2013.http://www.ucdp.uu.se/gpdata/gpcountry.php?id=158®ionSelect=10-Middle_East# (Accessed May 21, 2013).